

ハイドン／交響曲第 95 番八短調 Hob. I :95

大バッハの子供世代を先駆けとする交響曲の形式をさらに発展させ、ひとつの完成形へと導いたのがヨーゼフ・ハイドン (1732-1809) である。1790 年、ハイドンが 30 年近く楽長として仕えてきたニコラウス・エステルハージ侯爵が世を去ると、息子のアントン侯は音楽家の大半を解雇してしまい、ハイドンも名目上は楽長のままだったが自由な活動を許された。そんな彼を待ち構えていたのが、ロンドンで活躍するヴァイオリニスト、ペーター・ザロモン (1745-1815) だった。当時ハイドンの名声はパリをはじめヨーロッパ中にとどろいていたが、ザロモンは自分が主催する連続演奏会で、ハイドンの新作を含む交響曲を作曲家自身の指揮で演奏するという大きな企画を持ち込んだのである。ハイドンはこの申し出を受けて、ザロモン演奏会の 2 シリーズ (第 1 期 1791-92、第 2 期 1794-95) で計 12 曲の新作交響曲を発表し、ロンドンの聴衆に熱狂的に迎えられた。約 40 人で構成されるザロモン・オーケストラの大きな編成と高い技術力は、創作意欲を刺激したに違いない。

交響曲第 95 番は、シリーズ第 1 期の 1791 年に初演され、ザロモンのために書かれた交響曲 12 曲のうち唯一の短調作品である。序奏なしに冒頭から木管と弦によっていきなりフォルテで開始される短調主題は、さぞかし聴衆に衝撃を与えたことだろう。楽器編成は、フルート 1、オーボエ 2、ファゴット 2、ホルン 2、トランペット (またはクラリーノ) 2、ティンパニ、弦 5 部というもので、この時はまだクラリネットは含まれていないが、前後に書かれた 2 曲はフルートが 2 本であり、シリーズ第 2 期にはクラリネット 2 本も加わって、2 管編成の形ができあがることになる。

第 1 楽章 アレグロ・モデラート、八短調：短調の第 1 主題と長調のおだやかな第 2 主題がはっきりと対比されている。

第 2 楽章 アンダンテ・カンタービレ、変ホ長調：変奏曲の形式で書かれている。

第 3 楽章 メヌエット、八短調：トリオ (中間部) では独奏チェロが主役をつとめる。

第 4 楽章 フィナーレ ヴィヴァーチェ、八長調：フーガの手法を用いた明朗な音楽である。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。